
インフィニティット・ストラトス～ウルティメット・ゼロ～ パイロット版

豪商院影正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニティット・ストラトス〜ウルティメット・ゼロ〜パイロット版

【Nコード】

N8328X

【作者名】

豪商院影正

【あらすじ】

名前の通り、表題作の試験的読みきり、いわゆるパイロット版です。

コメントでの評価しだいでは、連載も視野に入れております。

（前書き）

これは、今構想中のIS×ウルトラマンゼロの、一部設定をオミットしたパイロット版です。

皆さんの評価しだいで、連載する予定もあります。

俺が『彼』に出会ったのは、ある意味で『運命』だったかもしれない。

『彼』は俺たちを守ろうとし、俺はみんなを守ることが欲した。そして俺たちは、一つになった。

『シールドエネルギー。勝者、セシリア・オルコット。』

「・・・あれ？」

一夏は、一体何が起こったのか理解できなかった。そしてすぐに理解した。

おそらく、この武器、雪片式型は自身の機体のエネルギーを相当消費するものらしい。

そして、その異常なエネルギー消費によって自分は負けた、というわけだ。

一夏は自身の油断にあきれた。

この手の武器の使い方は自分が一番よくわかっていたはずなのに。そう思い盛大にため息をつこうとした瞬間。

アリーナの天井が割れた。

そしてそこに現れたのは、逆さの円錐形の上部に、板を2枚貼り付けたような例えようのない『何か』。

そしてその『何か』には、『頭』の部分に単眼のような器官が見て取れる。

「あれは・・・!!！」

一夏はそれに見覚えがあった。

正確には、一夏ではなく『もう一人』の方が、なのだが、この場合はどちらにしろ同じだ。

なぜなら、『彼』と一夏は肉体も精神も一つなのだから。

「な、なんですの!?!これは!?!」

セシリアが訳もわからず混乱している。

一夏はあせる。

『何か』の位置は、ちょうどセシリアの後ろに位置している。

「まずい、逃げる、オルコット!!」

言うのが早いか、動くのが早いか、一夏はセシリアを押しつける。

同時に、『何か』はその『眼』から光弾を打ち出した。

「一夏!!」

その頃、アリーナで試合を見ていた篤が、突然現れた『何か』に混乱していた。

「落ち着け、篠ノ之。みろ、織斑は無事だ。」

千冬がなだめる。実際、一夏はセシリアをかばいつつも、見事に光弾を避けている。

しかし、この状況で落ち着けといわれても、普通は無理だ。

「先生!でも!」

「でもじゃない。問題ないさ、あの程度。とにかく、篠ノ之も山田先生も早く非難を。」

「ちょ、ちよつと待ってください!織斑先生!!」

山田先生が明らかにあわてた様子で千冬に詰め寄る。

「し、侵入者ですよ!?正体不明の!」

その言葉に千冬がああ、と気づいたように言い。

「大丈夫だ。正体は大体わかってる。」

彼女の言葉に、二人ともわけがわからないという顔をする。

そして篤は気づく。この状況のおかしさに。

それは、千冬があまりにも落ち着きすぎているということだ。

いくら彼女でも、自分の弟が危険な状況におかれているというのに、あまりにも冷静にしすぎではないか?

彼女が弟を誰より大切に思っていることを知っているからこそ、そのおかしさは際立って写る。

すると千冬は管制室のコンソールを操作し、モニターのカメラを才

フにする。

「……！！織斑先生、なにを！？」

山田先生の驚きを無視し、千冬は今度はマイクのスイッチを入れ、確かにこう言った。

「おい、一夏。いまカメラをオフにした。オルコットは後で黙らせるから、遠慮なく潰せ。」

そして千冬ははまだ混乱する二人の方を向いた。

「二人も、ここから先は他言無用だ。」

「千冬姉！よっしゃ、それなら！」

一夏は待つてましたとばかりにどこからか拳銃のようなものを取り出した。

ただ、それは正確には拳銃とはいいがたい。

銃身もあまりにも短いし、何よりあまりにもカラフルに過ぎる。

「ちょよ、ちょよと！黙らせるって一体！？それにそれは何なんですか！？」

セシリアが質問するのも無視して、一夏は『拳銃』を『何か』

デルストに向けて、引き金を引いた。

すると、『拳銃』から緑色の光が放たれ、デルストに当たり、火花が散った。

「！？そ、それは一体！？」

「いいから、地上に降りるオルコット！！」

そのまま若干無理やりにセシリアを地上に下ろすと、一夏はISを解除した。

「ちょよと！危険ですわよ！？」

「いいから見てな！」

そして一夏が、拳銃を展開した。

展開したそれは、ちょうどゴーグルのようだ。

そして、一夏はそのままそれを顔に当てた。

一夏の体が光に包まれた。そして、光が収まった後、そこに一夏は

いなかった。

鎧の様な頭部に胸当て。

体は銀をベースに、上半身は青、下半身は赤のカラーリング。

額には小さなライトが一つ。頭の上には鶏冠のような頭飾りが二つ。その眼は、その場にいた誰より力強く、鋭い眼光を放っている。

そして胸の中心には、青い光をたたえるライトのようなものが収まっている。

おそらく一夏だった『彼』は、力強く、さつき一夏がいた場所に、力強くそびえ立っていた。

デルストが、彼の姿を見た瞬間、先程とは比べものにならない威力の光弾を放つ。

しかし、彼は驚きもせず、片手でいともたやすくそれを受け止めた。「・・・その程度かよ。」

『彼』が、見下した声色でデルストをなじると、『彼』はそのまま額から光線を放った。

光線はやすやすとデルストの体を貫き、デルストが爆炎と共に四散する。

しかし、『彼』は落ちてくるデルストの体を未だに睨み付けている。「前座は終わりだ。ここからが本番だろ？」

そして、爆炎の中から、『彼』によく似た『何か』が3体現れた。しかし、よく見るとカラーリングも違うし、眼も一つ目だ。

『彼』は、その『何か』に向かって挑発するように手招きする。「来いよ。偽者野郎共。相手してやる。」

『ウルトラマンゼロを確認。破壊。』
3体は『彼』に向かって駆け出した。

『彼』は明らかに人間のものとは思えない高さでジャンプする。「遅いぜー!!」

『彼』はそのまま、頭飾りに両手を持っていき、その頭飾りをブーメランのように投げつける。

ブーメランはあつという間に3体のうちの2体に向かっていき、そのままその胴体を切り払った。

断面から、機械のようなものが見えたと思ったら、そのまま2体とも爆散する。

ブーメランが『彼』の手に収まると、『彼』はそれをナイフのようにして最後の1体に向かって切りつける。

しかし、『何か』も『彼』と同様にして、ナイフを構え、防御した。「ふん、なかなかやるな。なら、こいつはどうだ！」

そのとき、『彼』のナイフが光と共に姿を変え、2本の剣に変化する。

一方が長く、一方は短い、まるで、二刀流のような構成。

「いくぜ!!!」

『彼』はそのまま『何か』に向かって切りつける。

あまりにも鋭い剣裁きに、相手はついていけず、斬激を何度もうけてしまう。

『何か』はふらつきながら後ろに後ずさった。

「止めだ!!!」

『彼』はそのまま剣を元の形態に戻すと、それをそのまま胸のライト部分の横につけた。

彼が構えると同時に、光、いや、エネルギーが彼の胸に集まっていた。

「終わりだあ!!!」

彼が腕を開くと同時に、そのエネルギーが相手に向かって一気に解放された。

そのあまりの威力に、彼の足元が一気にへこんでしまうほどの力。光を受けた『何か』は、耐え切れず一気に爆散してしまった。

ダークロプスをいとも簡単に退けた『彼』。

『彼』の名は、織斑一夏。またの名を、ウルトラマンゼロ。

あの日、みんなでキャンプに言ったあの日。
俺たちはいいつら、ダーククロスたちに襲われた。

そして、『彼』が現れた。

ダーククロスに似ているけど、まったく違う、力強い姿。

別の次元から、ダーククロスたちを退けるために。俺たちを守るために。

彼は「にげる」と言った。でも、俺はそうしなかった。

次元を超えることは、いくら彼でも至難の業で、彼の体力は殆どつきかけていた。

俺には、彼を見捨てることは出来なかった。

だから俺は言ったんだ。

「一緒に戦いたい。俺に、あんたを、みんなを守らせてくれ。」

そうしたら、彼はためらいがちに、俺と彼が一心同体になるという方法を示した。

彼の本意ではなかったかもしれない。

いきなり、見ず知らずの他人を戦いに巻き込むことなんて。

俺も、彼も、誰かを巻き添えにはしたがらず、一人で抱え込んでしまつから、それはよくわかった。

でも、俺は迷わずそれを選択した。

俺も、みんなを守りたかつたから。

何より、ふらふらの彼を見捨てて逃げたら、俺は、俺のなりたい俺に一生なれないと思つたからだ。

そして、俺は彼と一つになった。

俺は、ウルトラマンゼロになった。

どんな敵が現れようと、みんなは俺が守って見せる。

俺達のビックバンは、もう止められないぜ！！

(後書き)

いかがでしたでしょうか。

先程も言いましたとおり、皆さんの評価しただいでは、連載も考えております。

また、その場合、本来の設定を加え、数話まとめたのUPになると思います。

是非とも、ご意見ご感想をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8328x/>

インフィニティット・ストラトス～ウルティメット・ゼロ～ パイロット版

2011年11月12日19時15分発行